

令和8年度パネル展（会期：令和8年9月25日（金）～12月20日（日））



四王寺山三十三石仏の健康診断

1 四王寺山三十三石仏について

大宰府政庁跡の背後にそびえ立つ^{し おう じ やま}四王寺山。ここに、江戸時代後期、三十三体の石仏からなる「四王寺山三十三観音霊場」が開かれました。

この霊場が開かれたのは、江戸時代の寛政年間に、博多で洪水や大火、疫病に見舞われたことがきっかけです。こうした災いに対し、博多の^{おも}主だった人たちが発起し、そこに宇美、太宰府の心ある人たちが協力して、西国三十三観音霊場にならった石仏めぐりの札所が、四王寺山の頂部を一周するように開かれました。その後、大正から昭和初期には、観光案内に紹介され、多くの人がおとずれました。そして、令和元（2019）年には、太宰府市民遺産第15号の認定を受けました。

今でも、お花が供えられ、信仰の対象として生き続ています。



3 番札所 千手観音立像



12 番札所 千手観音坐像

2 石仏の健康診断

近年、石仏の劣化の進行が顕著になっていると危惧されました。個々の石仏をみると、程度の大小はありますが、劣化や損傷が生じており、何らかの保存修復を講じることが求められました。しかし、広大な四王寺山に点在する石仏を一体ずつ、修復を施すのは時間もかかり、困難を極めます。

そこで、石仏が置かれている周辺環境や劣化の現状を把握、評価し、今後の保存環境や修復、管理方法を計画するために現況調査を行いました。これを医療に例えると、患者さんの住環境や健康状態を把握し、今後の健康的な生活や治療方針を考える、「健康診断」といえます。

この健康診断は、当館と太宰府市景観・市民遺産育成団体であり、この石仏の見守りを行う、「四王寺山勉強会」のメンバーと共同で行いました。まず、石仏の症状（劣化状態）を把握するため、人間と同じようにカルテを作成します。カルテには、身体計測（法量）、住環境（保存施設）、症状（劣化状態）、診察（観察）、診断結果（劣化状態の評価）を項目として、現地に往診し、石仏と対面して検診を行いました。対象は「三十三観音札所」の33体と一部に並置される4体の計37体です。



健康診断の様子

3 健康診断の結果

診断結果を評価すると、どの石仏にも何らかの症状はありました。尊像や文字を観察できる状態の石仏が多いのですが、健康診断の対象となった37体のうち、11体31%の石仏が、観察や形状の維持に支障が生じています。また、症状（劣化）の要因をみると、全ての石仏に生物的要因である、地衣類・藻類があります。次いで、物理的要因の摩滅があり、欠損、亀裂、割れ、剥離、亀裂がみられます。これは、風雨や日光による温度変化の影響が考えられます。なかでも28番札所は、顔の表情がうかがえず、剥離が著しいなど、全体的に症状が重く、原形を損ねています。

しかしながら、置かれる台座や自然石とをモルタルのような材料で固定される石仏や、29番札所のように割れを何らかの材料で接合、補填されている石仏もあり、保存のために何らか手加えられていることがわかりました。これは、過去に保存状態を懸念し、応急処置した方たちがいることを示すものです。つまり、私たちが今、進めている保存の営みは、過去からあったのです。一方、毘沙門堂にある25番札所や四王寺集落にある33番札所は、周囲の木々が伐採されており、清掃が行き届いているなど、石仏の住環境のみならず、巡礼する環境としても良好であると感じられます。こうした石仏の住環境も気を配っていきたいとこ

ろです。



光背の剥離 (28 番札所)

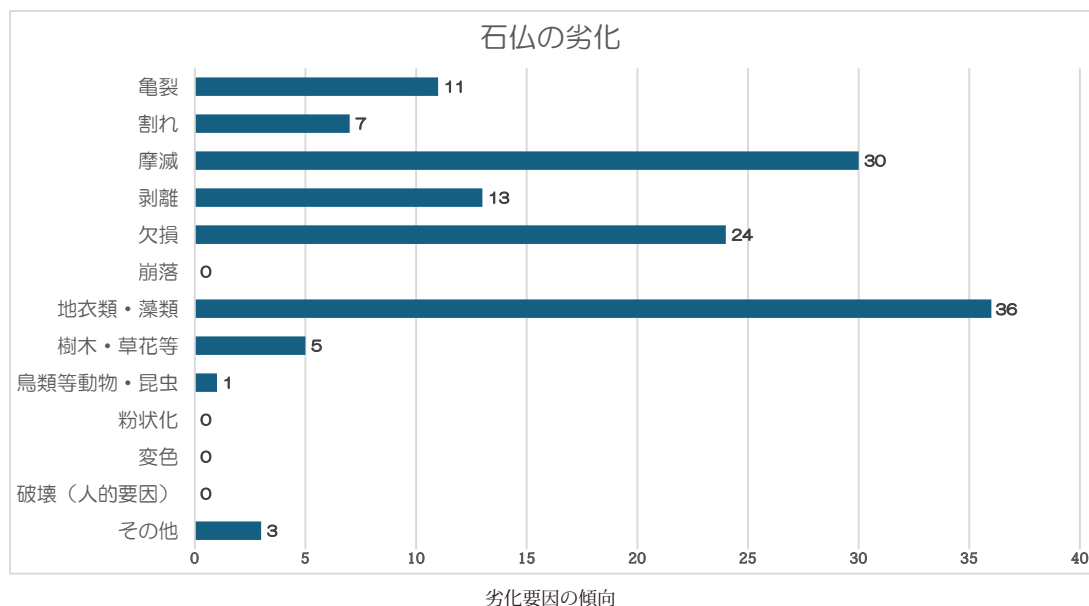
顔の下部の接合 (29 番札所)

4 石仏の健康管理への取り組み

石仏の傷みは複数の要因によって決まり、石仏の体質（石材の物性）や、普段の生活環境など、要因は複雑になります。そして、広大な四王寺山に散在する石仏の個別を対象とした、症状の原因究明と治療（保存修復）を実施するのは、困難があります。

そこで、この三十三石仏においては、今、伝えられている形のまま、現地に長く残すことを目的とし、今後は症状の発生原因を探りつつ、できるだけ、傷みを防ぎ、これ以上、症状が重くならないようにする「予防医療（予防的保存）」を目指す対策を考えていきます。

（学芸調査室 加藤和歳）



編集

発行：令和8年9月25日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <https://kyureki.jp>